

ベトナムにおけるダークツーリズムの社会空間 ——革命史跡としてのクチトンネル

大塚 直樹

1. はじめに

Lennon と Foley によれば、20 世紀末から 21 世紀初頭、言い換えればポストモダン的な社会状況下のなかで、観光客が比較的新しい時代の死、災害、残虐な行為などに大きな関心を払うようになったという。彼らは、人びとの負の遺産への関心の高まりをダークツーリズム (Dark Tourism) と呼び、死や悲劇を連想させるような場所を対象とした観光 (産業) に根本的な変化が生じていることを示そうとした (Lennon and Foley 2000: 3)。両者は、こうしたダークツーリズムを「訪問者による現実の表象・消費、かつ死や被災地の商品化」と定義した (Foley and Lennon 1996b: 198)¹⁾。

ダークツーリズムがポストモダニティの暗示である根拠として、Lennon と Foley は、以下の 3 点を指摘する。第 1 に、死などへの関心が現代のグローバルなコミュニケーションテクノロジーに依拠していること、第 2 に、ダークツーリズムの実践それ自体が近代へのアンチテーゼ (近代に対する不安や懐疑) であること、第 3 に、教育的な要素を有する遺跡が商品化や商業的な倫理をとめない、結果として観光地としての発展につながっていること、である (Lennon and Foley 2000: 11)。言い換えれば、Lennon と Foley は、ダークツーリズムを「時間・空間の圧縮」(ハーヴェイ 1999) という社会状況下に特徴づけられた観光空間ととらえていることがわかる。

こうした Lennon らの先駆的研究に基づき、Seaton は、死観 (thanatopsis)

に動機づけられた歴史的な旅行（トラベル）、すなわち主として慰霊の旅との比較から、ダークツーリズムが有する現代的な意義を指摘した（Seaton 1996; 2002）。また、Stone は、ダークツーリズムの類型化の必要性を提唱し、ツーリズムの提供側の視点から、エンターテインメント性・商業的な要素が強いダークファンの中心地（Dark Fun Factories）や教育的な効果を見込む負の展示（Dark Exhibitions）など、七つの分類を試みた（Stone 2006）。さらに、Stone と Sharpley は、消費側の視点からみたダークツーリズムの概念化がなされていないことを指摘し、死観の枠組み（thanatological framework）のなかで事例研究を蓄積する必要性を提示した（Stone and Sharpley 2008）。

本稿では、以上のような先行研究を参考にしつつ、社会主義的な傾向を示すダークツーリズムの事例を検討することで、近代的な負の遺産がもつ空間的な意義を検討し、その政治的な特徴を明らかにすることを目的とする。具体的には、ベトナム戦争の結果、革命史跡となったクチトンネルを対象とする²⁾。以下では、クチトンネルの概略を述べたのち、クチトンネルツアー、言い換えればダークツーリズムがどのように表象されているのかを旅行会社のパンフレットや旅行ガイドブックから検討する。さらにダークツーリズムのツアー実践から考察をおこなう。合わせて今後の調査研究に向けた着眼点を提示する。

なお、先行研究で論じられている死観／死生観は、キリスト教的ないしキリスト教に基礎づけられた観念ととらえられる。したがって、非キリスト教圏における事例研究においては、死生観の相違を考慮に入れて検討する必要がある。しかしながら、これらの研究がダークツーリズム研究の基本的な枠組みを提供していることもまた事実である。

2. 舞台としてクチトンネル

クチトンネルは、ホーチミン市クチ県に位置し、ホーチミン市の中心部から北西に約 70 キロメートルの距離にある。現在、観光地化しているトンネ

ルは、クチ県北西部のサイゴン河に面したベンディン（Ben Dinh）と、そこからさらに6キロメートルほど道なりに北上したベンズック（Ben Duoc）があげられる。

クチトンネルのオフィシャルホームページによれば、ベンズックは、1979年に国家歴史文化遺産に指定され、ベンディンは、2004年に国家歴史遺産に認定された（Dia Dao Cu Chi 2019年9月26日閲覧）。ただし、当時の文書（so: 54 VH-QD/1979）を確認すると、ベンズックは「クチ抗米・救国歴史遺産地区」として登録されていた。このことから、二つのトンネルともに歴史遺産に分類されていたと理解しうる。その後、2015年12月23日には「クチトンネル歴史遺産（Di tích lịch sử Địa đạo Củ Chi）」として国家特別遺産に指定された（so: 2367 QD/TTg/2015）。この首相決定では、ホーチミン市クチ県の遺産として認定されている。したがって、現在では二つのトンネルをあわせて国家特別遺産として登録されていると考えられる。なお、国家特別遺産は政府首相によって認定されるのに対して、国家遺産は文化スポーツ観光省によって認定を受ける。

二つのトンネルのうち、ベンズックは、いち早く歴史遺産に指定され、その規模も大きい。しかしながら、ホーチミン市中心部から近いこともあり、現在、多くのツアー客は、ベンディンを訪問する。

クチトンネルは、ホーチミン市近郊の有名な観光地の一つである。たとえば、旅行を全般的に扱うインターネットサイト「トリップアドバイザー」において、「トラベラーズチョイスアワード2017」と題して、各地域の「人気ランドマークトップ25」および各国の「人気ランドマークトップ10」が発表された。このなかで、ベトナムのトップ10では、ホーチミン市クチ県のクチトンネルが1位、「アジアの人気ランドマークトップ25」では、クチトンネルが8位にランクインしている（トラベラーズチョイス ホテルアワード - トリップアドバイザー 2017年7月15日閲覧）。

こうしたクチトンネルの歴史を紐解くと抗仏戦争にまでさかのぼる（表1参照）。フランスの再侵略に対抗したベトミン（ベトナム独立同盟）は、ク

表1 ベトナム戦争関連の略年表

年	月	事 項
1941	5	ベトミン（ベトナム独立同盟）結成
1945	8	8月革命
	9	独立宣言、ベトナム民主共和国樹立
	9	フランス軍が南部制圧
1946	12	第1次インドシナ戦争
1949	6	ベトナム国発足（バオダイを元首）
1954	5	ディエンビエンフーの戦い
	7	ジュネーブ停戦協定調印
1955	10	ベトナム共和国発足
1960	12	南ベトナム解放民族戦線結成
1962	2	在ベトナム米軍事援助司令部設置
1965	3	恒常的北爆開始、米海兵隊上陸
1968	1	テト攻勢
1969	6	南ベトナム共和臨時革命政府樹立
1973	1	パリ和平協定調印
	3	米軍の完全撤退
1975	4	ベトナム戦争終結
1976	7	ベトナム社会主義共和国に改称
1977	1	新祖国戦線発足

出典：『ベトナムの事典』（同朋舎、1999年）などから作成。

チ地域を一拠点として戦闘をおこなった。抗仏戦争に際して、フランス軍の攻撃を逃れるため、隠れ場所として掘られた塹壕がトンネルのルーツとなった。さらにベトミンは、集落間を結ぶトンネルを構築し続け、フランス軍の攻撃や偵察機を回避した。

クチトンネルを体系的に掘進した関係者にインタビューをした、Mangold and Penycateによれば、トンネルの構築はフランス軍に一時的に占拠された領域で始まったという。理由として、ベトミン側の戦力が限られており正規

軍との直接的な戦闘に耐えられなかったこと、したがって、時と場所と攻撃対象を選択して対抗するしかなかったことがあげられている。1948年にはこうしたトンネルシステムが構築されていた。1960年に南ベトナム解放民族戦線が結成され、ベトナム共和国政府との戦闘が激しくなった後、トンネルの補修工事がおこなわれた。その後もトンネルは掘り進められた。抗仏戦争時に全長約48キロメートルであったトンネルは、1965年には約200キロメートルまで拡張された（Mangold and Penycate 2005: 36, 39）。

また、ベトナム戦争期のクチエリアの重要性として、カンボジアを通るホーチミンルートの出口にあたり、かつサイゴンまで陸路でも水路でも移動可能であったこと、雨季であっても軍隊や車両の移動が容易な領域であったことがあげられている（Mangold and Penycate 2005: 33）。

3. 革命史跡のとらえ方 ——旅行パンフレット・ガイドブックから

現在、インターネットおよびそれにともなうSNSの普及によって、旅行ガイドブックやパンフレットの位置づけが変化している。旅行ガイドブックを持たずに海外個人旅行をする人びとも増えてきており、ガイドブックは、個人旅行者の水先案内人的な役割を失いつつある。他方において、こうしたメディアは、旅行を提供する側の「ツアー（観光地）の売り方」を示していることも事実であろう。言い換えれば、旅行者に「場所の見方」を提供している。

現地旅行会社のクチトンネルに関するパンフレットや旅行ガイドブックの紹介内容を以下に示す。

A社のパンフレットは、いくつかの言語版が置かれていた。ここでは、日本語以外に翻訳可能な英語・ベトナム語を示した。

日本語版パンフレット（日本語については原文ママ）

Cu Chi トンネル・半日ツアー

午前7:45 ○○前に出発。

Cu Chi トンネルに到着後、現地駐在人のゲリラ戦争についてのドキュメンタリーを見て、戦争武器の博物館を観光し、アメリカ・ベトナム戦争に使用された200kmのトンネルを体験。

午後2:00 ○○前で解散。

英語版パンフレット

クチトンネル半日

クチトンネルは、ホーチミン市の中心部から約70km離れた場所に位置し、ベトナム解放戦争の最も有名な歴史遺産の一つである。トンネルの全長は200kmで、それぞれのトンネルがクモの巣のようにつながっている。

トンネルは、簡素な道具で強い意志と我慢強さに支えられつつ掘られた。その後、入り口はカモフラージュされ、敵兵は誰もそれを見つけることができなかった。

午前7:45 ○○オフィス前を出発。

9:30頃、クチトンネル（Ben Dinh）着後、地下の兵舎でクチトンネルについての簡単なビデオを鑑賞する。その後、トンネル内での実際の生活を体験する。さらに戦争中にクチの人びとの主食であったふかしたキャッサバを試食する。興味があれば、AK47かMK16の実弾を試射することもできる。正午にクチトンネルを出発、ホーチミン市に到着後の昼食は実費となる。

ベトナム語版パンフレット

クチトンネル

午前7:45、○○オフィス前をクチに向けて出発。午前9:00、クチト

ンネル着。到着後、地元の人びとのゲリラ戦に関する資料映像を視聴し、戦争武器博物館およびベトナムとアメリカとの戦争（chien tranh Viet-My）時に使用された全長 200 km の地下トンネルを見学する。

その他に希望があれば、トンネル近くの射撃練習場で AK47 か MK16 を試射することができる。

上記は、同じ半日ツアーの紹介文である。A 社のパンフレットに共通して登場するキーワードは、「ゲリラ戦についての映像資料」、「トンネルの全長が 200 km」である。日本語とベトナム語のパンフレットには、共通して「武器博物館」があげられている。なお、日本語の記述はベトナム語版から一部を直訳したものと推察される。また、英語とベトナム語のパンフレットでは「ライフルの試射ができる」との記述がみられる。

三つの言語のなかで、英語パンフレットがもっとも詳細な説明がなされている。はじめにクチトンネルの概要を示した上で、ツアー日程が提示されている。ただし、同社の別ツアー「クチトンネル - ミートー・ベンチュエー 1 日」のベトナム語版パンフレットでは「戦時下でのクチの人びとの生活を理解するため、無料でごま塩とともにキャッサバを食べることができる」と記載されている。したがって、英語とベトナム語のパンフレットは、ほぼ同じ紹介内容ととらえてよいだろう。

次に B 社のパンフレットを示す。この旅行会社では、2017 年 5 月の調査時に日本語・英語のパンフレットを確認できなかった。

ベトナム語版パンフレット

クチトンネル

ホーチミン市から北西 70km に位置するクチトンネルは、クチ県における地下防衛システムの一つである。クチトンネルは、ホーチミンルートの終点に位置し、「鋼の砦」と呼ばれた。このトンネル網は、抗仏戦争およびベトナム戦争時に南ベトナム解放民族戦線によってつくられた。1968

年のテト攻勢（Chien dich Tet Mau Than）の時、南ベトナム解放民族戦線は、サイゴンを攻撃するために、このトンネル網を利用した。

午前：8時に〇〇旅行社の車・ガイドがオフィス前で出迎え、クチに向けて出発する。クチ到着後、映像資料を視聴し、トンネル内を見学する。具体的には、地面に仕掛けられたトラップ、地下の作業場やトンネル内での生活の様子、Hoang Cam レンジ（無煙レンジ）を見学する。さらに、戦争当時の食生活の解説を聞いた上で、おにぎりやふかしたキャッサバを試食する。あわせて戦車やベトナムの兵士のマネキンと一緒に記念撮影をする。さらに希望者は、AK47の実弾を試射できる（実費）。

午後：午後3時、バスがオフィスに到着。ツアーはこれで終了。さよなら、また会いましょう。

A社と比較すると、B社のパンフレットは、クチトンネルがつくられた歴史的背景ならびにツアー内容をかなり詳しく説明している。また、ツアーの出発が朝8時とやや遅く、一日ツアーとして売り出している点にA社との違いがみられる。

なお、パンフレットの最後にみられる「ベトナムの兵士」*ngui linh Viet Nam*の*linh*とは、一般的に兵士と訳すこともできるが、『ベトナム語大辞書』の一義的な意味では「帝国軍や封建軍に参加した人びと」となる。同語を組み合わせた単語には、たとえば、*linh tap*（フランス植民地時代のベトナム軍人〔フランス植民地政府側に参加したベトナム軍人〕）や*linh tay*（フランス植民地時代のベトナムにおけるフランス軍のなかのアフリカ系軍人）のように、用語説明の最後に「蔑称の意」(*voi y coi khinh*)という注意書きがついている（〔 〕内は引用者注記）。

次に旅行ガイドブックの記述を以下に示す。ここでは、ベトナム現地で出版されているベトナム語および英語の旅行ガイドブックの記述を紹介する。

Non Nuoc Viet Nam (ベトナム語)、2009 年 (第 10 版)

クチトンネル

クチは、ホーチミン市における革命史のなかで最も有名な地名の一つである。トンネル遺跡は 2 カ所ある。一つ目は、Phu My Hung 行政村 Phu Hiep 集落に位置する Ben Duoc、二つ目は、Nhuan Duc 行政村に位置する Ben Dinh である。両者ともホーチミン市中心部から北西に 75 km にあるクチ県に位置する。

トンネルは、地下深くまで掘られ、何層にもなっている。それぞれ [の地下の部屋] がつながっている独特の構造を有する。このトンネルでは、食事や就寝することができ、また集会を開いたり、戦闘を展開したりできた。この秘密トンネルは、抗仏期 (1948 年) から掘られ始めて、当時は 17km 程度の距離であった。1960 年以降、このトンネル網を補強し、全長 200 km 以上に拡張した。一番深いところでは、地下 8-10m まで掘り下げられた。クチは、「トンネルの戦争」の地名 [異名] をもつとともに「鋼の大地」という称号を得ている ([] 内は引用者)。

この歴史遺産には、国内外から常に多くの観光客が訪れている。とくに、ベトナムの高級官僚・指導者や多くの国の国家元首がここを訪れている。

クチトンネル歴史遺跡は、国家歴史文化遺産に指定されている。

Viet Nam Tourist Guidebook (英語)、2008 年 (第 5 版)

クチトンネルは、ベトナム解放戦争における最も有名な歴史遺跡の一つである。ホーチミン市から約 70km 離れた Cu Chi 県 Phu My Hung 行政村に位置する。トンネルのネットワークは、全長 200km にもおよび、クモの巣のように相互に連結している。トンネル内部には、台所、食料庫、武器弾薬庫、医務室、集会所、司令部などがあった。革命勢力は、1968 年の総攻撃、南部解放に向かう 1975 年 4 月のホーチミン作戦を、この地下村から計画・実施した。

トンネルに足を踏み入れた人びとは、共産ゲリラの能力、意志の強さ、忍耐力に感嘆するであろう。人びとは、簡素な道具で掘り進め、何万トンもの土や石を除去した。そして、トンネルの入り口をうまくカモフラージュしたため、誰もそれを見つけることができなかった。

クチトンネルは、毎日朝8時から午後4時まで見学可能。

前者のガイドブックでは、クチトンネルが国家歴史文化遺産（ママ）に指定された革命史跡であること、複雑な構造をもつトンネルでは日常生活を送るだけでなく戦闘の準備が可能であったこと、が示されている。後者では、クチトンネルがベトナム解放戦争における有名な歴史遺産であるだけでなく、革命勢力にとって重要な軍事拠点になっていたこと、トンネルでは日常生活を送ることができ、戦闘に備えられたこと、共産ゲリラ（Communist guerrillas）の不屈の意志を実感できること、が記載されている。

これらの旅行ガイドブックでは、当然ではあるが、旅行会社のパンフレットと異なり、具体的なツアー内容ではなく、クチトンネルの歴史的背景とその意義が記載されている。要約すれば、クチトンネルとは、第1に革命勢力の主要な拠点の一つであり、第2に日常生活の場でもあったゲリラ戦の主戦場であり、第3に民族解放への強い意志を確認できる史跡である。

第3の点について、*Lonely Planet* のベトナム版（2016年、第13版）では、全4ページにわたりクチを紹介する、その冒頭で「もしベトナムの人びとがもつ不屈の精神を場所で指し示すのであれば、クチほど適例はない」と始めている。当然、この記述は、クチトンネルことを指している。また、2冊のガイドブックでは、B社のパンフレットにみられた「南ベトナム解放民族戦線」の表現のかわりに「革命勢力」や「共産ゲリラ」という用語が使用されていることが注目される。

4. パッケージツアーの実践

ここでは、前述したA社のツアーを事例として取り上げる³⁾。ツアーの予約は、原則として前日までにオフィスでおこなう。ツアーの予約時にオフィスで一人あたり109,000ドンを支払い、バウチャーを受け取る。バウチャーには、出発日、行き先（ツアー名）、国籍、出発時間、参加人数、バスの番号、座席番号が記載されている。また、クチトンネルに向かうバスのなかで、クチトンネルへの入場料2万ドン、ガイド料9万ドンを支払う。ただし、ベトナム人はガイド料が免除されている（2018年3月現在）。

ツアーは、7時15分にオフィス出発予定で、30分前の6時45分が当日の集合時間になっている。なお、1回目の2017年5月のツアー参加時には、7時15分集合、7時45分出発であった。出発前にオフィスでバウチャーを提示して、乗車券を発券してもらい、出発をまつ。マイクによるアナウンスがベトナム語と英語であり、その後、ツアーガイドの案内でバス乗り場へ向かう。

2018年3月のツアーでは、合計36名、うち白人5名、ベトナム人3名、その他に韓国人、中国系とおぼしき人びと、ヒジャーブをかぶった人びと、日本人などが参加者であった。韓国人の割合がもっとも高かった。2017年5月のツアーでも同様に韓国人が最大グループを形成していた。また、2回のツアーともに確認できなかったものの、ベトナム人の参加者は、越僑（Viet Kieu）である可能性がある⁴⁾。

クチトンネルに向かう車中では、ツアーガイドが英語で解説をする。まず、ベトナムでは歴史的に戦争が繰り返されてきたことが説明される。その後、ベトナム戦争の概要が解説される。ツアーガイドによれば、ベトナム戦争とは冷戦構造のなかでのアジアの共産化を恐れたアメリカが介入したものであり、ベトナム側はその介入を自然資源の収奪とみなした。したがってベトナム人は、アメリカではなくコミュニストを支持した。クチトンネルとは、こうした戦争の遺跡であり、クチの人びとがトンネル内で生活をしながら

ら、いかに戦ったのかを疑似体験できる場である。その後、クチトンネルの特徴やトンネルが演じた役割を説明していた。ツアーガイドは、合計40分以上にわたり、これらの解説をしていた。

出発から約1時間半でクチトンネル（Ben Dinh）に到着した。その後、ツアーガイドがまとめて入場券を購入し、クチトンネルの施設内に入場した。以下、参観順に示す。

①トンネル（武器庫）の入り方

武器などを隠す場所であったと解説される。体格のよいアメリカ兵は入れないようになっている。細身のクチの人びとは入ることができる。「やせた」という表現には、食糧が十分になかったとのニュアンスであることが説明された。ただし入り口のふたを両手でもち、それを掲げた状態でないと入れない。ふたの裏側に手榴弾をしかけることもあった。入り口は20×30センチとのことであった。入り口は木製になっていた。理由として雨季に木が水分を含み膨張することで、パッキンの役目を果たして地下壕内部への水漏れを防ぐためと説明された（写真1）。ここでは、実演があるとともに観光客も体験ができる（写真2・3）。

なお、旅行ガイドブックの『るるぶ』（ベトナム カンボジア・アンコー



写真1 ツアーガイドが武器庫と説明した入り口（2018年3月撮影）。



写真2 スタッフによる実演（2018年3月撮影）。



写真3 実際に地下に潜る体験をする観光客。両手をあげて入る(2018年3月撮影)。



写真4 カモフラージュされたトンネルの空気孔(2018年3月撮影)。

ルワット、2015年)では、ここが防空壕(「攻撃から逃れる隠れ場」として紹介されている。また、ツアーガイドは、途中から単純にトンネルの入り口と解説を切り替えていた。

②トンネルの空気孔

カモフラージュのためにアメリカ兵が捨てていった軍服や備品などを使用して、アメリカ兵のにおいを周辺にしみつけることで軍用犬の探知を逃れたと解説していた。説明では、アメリカ軍はすべてを使い捨てにしていたという表現を使っていた(写真4)。

③罠

竹製のトラップの説明があった。具体的には毒を塗った複数の竹の槍を穴に敷設し、地上をカモフラージュして、罠が見つかりにくいようにしていたという(写真5)。



写真5 竹の槍が隠された罠(2018年3月撮影)。



写真6 実際のトンネル入り口（2018年3月撮影）。



写真7 戦争当時の衣服を身につけたマネキン（2018年3月撮影）。

今回参加した2回のツアーでは、②と③との参観順が入れ替わっていた。敷地内には多くの団体観光客が訪れており、ツアーガイドが混雑の状況を判断して、参観順を調整していると推察される。

④オリジナルのトンネルの入り口

後述する観光用（入り口を拡張したトンネル）ではなく、当時のままのトンネルの入り口であると説明していた。入り口が非常に狭く、こうした環境下でクチの人びとが生活していたことが強調されていた（写真6）。

ここで、ツアーガイドは、クチトンネルができた経緯を以下の3点から解説していた。第1に、クチ周辺が傾斜地であり、雨水がたまりにくいこと、第2に、硬い土壌のため、トンネルが崩壊しにくいこと、第3に、サイゴンから近かったこと、である。第2の点について、クチの人びとは硬い土壌を手工具のみで掘り進めたことを強調していた。

⑤当時の戦闘服を着たマネキン

ここでは解説というよりもフォトジェニックな場所となっていた（写真7）。



写真8 戦車に登り、自撮りをする観光客（2018年3月撮影）。



写真9 戦車には「アメリカのM41戦車は1970年に時限式の地雷で破壊された」との解説がみられる（2018年3月撮影）。

⑥投棄された戦車

アメリカ軍が投棄した戦車（M41戦型）との解説であった。観光客はこの戦車に登ることができた。ここも⑤同様、フォトジェニックな要素が強い場所であった（写真8・9）。

⑦トラップの展示

戦時中に使われていた八つのトラップの模型が展示されていた。それぞれで解説がおこなわれた（写真10）。加えてドアにしかけたトラップも展示されていた。

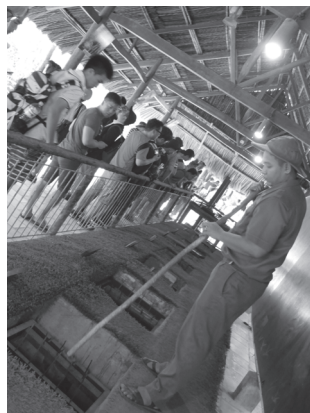


写真10 トラップの模型と実演するスタッフ（2018年3月撮影）。

⑧武器製作所

戦争当時の武器の製作所（Nha cong binh xuong）が再現された展示の解説がおこなわれていた（写真11）。

⑨ライフルの試射体験

希望者はM16もしくはAK47の試



写真11 武器の製作所（2018年3月撮影）。



写真12 ライフル試射場の概観（2018年3月撮影）。

射をできた。最低10発単位で、1発試射する料金が60,000ドンであった。2名で10発も可能であるとの説明があり、ツアー客の半分くらいが体験していた（写真12）。ここで希望者は戦時中の武器の展示をみることができた。

⑩トンネル体験（観光客用）

観光用のトンネルに実際に入る。20メートル、40メートルなどがあるとの説明であった。通常は20メートルのトンネルを体験する（写真13・14）。ツアーガイドはトンネルに入らなかった。



写真13 観光客用のトンネル入り口（2018年3月撮影）。



写真14 観光客用のトンネル出口（2018年3月撮影）。



写真 15 写真中央の木の背後が B52 による爆撃跡（2018 年 3 月撮影）。



写真 16 映像資料の視聴風景（2018 年 3 月撮影）。

⑪アメリカ軍による爆撃跡地

ツアーガイドは、B52 による爆撃跡地と説明していた（写真 15）。

⑫台所の展示

戦争当時の台所が再現されていた。ここでは、調理のときに出る煙によって、アメリカ軍に場所を特定されないように、朝靄がかかった時間帯に調理をしたり、煙突をのばしてカムフラージュしたりしていたことが説明された。

⑬当時の食事の試食

キャッサバがクチの人びとの当時の主食であったと説明される。一人につき一切れ程度が準備されており、無料で試食ができた。ごま（白ごま）塩をつけて試食した。

⑭映像資料の鑑賞

ベトナム戦争におけるクチでの戦闘を記録した映像資料の閲覧した（写真 16）。鑑賞時間は 10 分程度であった。ここではツアーガイドは同行せずにとくに解説がなかった。

ここまでのツアーの所要時間はおよそ1時間半であった。12時にはクチトンネルをバスで出発し、13時過ぎころに出発地点に到着、ツアーの解散となった。

5. 観光資源の政治化／脱政治化

戦争観光の考察には観光対象となる戦争の様態を把握することが不可欠となる。以下では、まずベトナム戦争を正義というキーワードから整理し、本章の考察の端緒とする（cf. 大塚 2019）。周知のように、ベトナム戦争は旧宗主国であるフランスのベトナムへの再侵略を前史とする。その後、フランスによるベトナムの再植民地化政策は、冷戦構造下の世界秩序のなかで共産主義・資本主義の両陣営を巻き込んだ戦争に展開してゆく。ここでは、ベトナム戦争を三つの正義の視点から整理する。

正義を意味するベトナム語は、chinh nghĩa ないし単に nghĩa、または công lý (công lý) と表現される。いずれも漢越語でそれぞれ「正義」と「公理」の漢字が当てられる。『ベトナム語大辞典』では、chinh nghĩa は「正当な道理。人間の権利を保証し、圧迫や不公平に抵抗すること」「またその精神をもつこと」、nghĩa は「正しい理屈、生き方の規範になること」と解説される。また、công lý は「社会で承認された正しい理屈、社会共通の道理や利益と一致すること」とされる。なお「正統（な）」の意味をなすベトナム語は、chinh thống（漢越語）であり、同辞典によると「ある朝廷や宗教の主流に属すること」「資格を十分に備えた、条件を満たしている（chinh thục）、ある領域や社会を指導（主導）すること」と解説される。chinh thục（漢越語で「正式」）の語は、同辞典によれば「法律や組織の規定に則った正しい方法」の意味となる。

正義 a とは南北に分断されたベトナム社会を統一しようと望む人びとのもの／立場／見方を指す。この勢力は、フランスと日本の侵略に対抗して1941年に組織されたベトミンを主体とする。1945年9月に独立宣言をした

ベトナム民主共和国は、フランスの再植民地化に対して、第一次インドシナ戦争を戦うことになった。1954年のディエンビエンフーの戦いにおけるベトミン側の勝利を経て、ジュネーブ協定が締結された。この協定は、北緯17度線ベンハイ河を暫定軍事境界線として、300日以内にベトミン側が以北に、フランス（・バオダイ）軍側が以南に集結することを定めた。さらに2年後の1956年に全土統一選挙が実施されることが謳われた。

これに対して、ベトナム南部では、1955年にアメリカの支援を受けたゴー・ディン・ジェム（Ngo Dinh Diem）を大統領とするベトナム共和国がつくられ、北緯17度線の国境化を画策した。17度線の国境化の動きに対して、北部に終結したベトミンを中心とする勢力は南北を統一することを目的としたキャンペーンを展開してゆく。加えて、1960年には南ベトナム解放民族戦線が結成され、南部における正義aの主体となった。

正義bはアジア地域の共産主義化を阻止することを目的としたアメリカが主体となった。1949年の中華人民共和国の成立、朝鮮戦争、中国における国民党と共産党の争いなど、アジア諸国にみられた共産主義化の動きに対して、アメリカは、資本主義国のリーダーとしてドミノ理論のもと、アジア諸国の戦争・紛争に介入していた。

南ベトナム解放民族戦線が結成されたことを契機として、アメリカのケネディ大統領がベトナムへ軍事顧問団を派遣した。ここからアメリカの軍事介入が始まった。以後、アメリカは、先に述べたようにベトナム共和国の支援を強化し、いわゆる「ベトナムの泥沼」に引き込まれていった。1965年には、ジョンソン大統領によって、恒常的な北爆が開始され、さらにアメリカ海兵隊の派遣が決定され、本格的に参戦した。1973年1月にパリ和平協定が締結され、同年3月にアメリカ軍はベトナムから撤退した。

正義cとは、前述のベトナム共和国建国を端緒として、ベトナム南部の独立を望むベトナムの人びとのもの／立場／見方を指す。正義cには、ジュネーブ協定の後に共産主義側からの弾圧を恐れて、北部から南部へと移住した人びとも含まれる。正義cを唱える人びとは、アメリカの支援の下、ベト

ナム南部・北部の正義 a のそれとの戦争を展開した。その後、ジュネーブ協定が締結されアメリカ軍が撤退し、「ベトナム戦争のベトナム化」によって全面的に正義 a を標榜する人びとと対峙した。アメリカの後ろ盾が間接的となり弱体化した正義 c の主体は、1975 年のベトナム人民軍の春季攻勢（ホーチミン作戦）によって、次つぎと拠点を失った。1975 年 4 月 30 日に当時のベトナム共和国の首都サイゴンを明け渡すことになった。

ベトナムの現体制下で正義 c を語ることに政治的な制約をとまう。たとえば、2017 年 4 月 30 日に Co vang ba soc do（黄底三線旗）を掲げたことなどを理由とした、反体制（国家）的運動に対する裁判が開廷したことが報道された（Bao An Giang Online 2018 年 1 月 25 日閲覧）。Co vang ba soc do とは、かつてのバオダイ・ベトナム（国）やベトナム共和国の（国）旗であり、言い換えれば、正義 c の流れを汲んでいる。また、同被告らが支持を表明していた臨時ベトナム国家政府（Chinh phu quoc gia Viet Nam lam thoi、所在地：アメリカ カリフォルニア州）は、2018 年 1 月 30 日にベトナム公安省からテロ組織の通知を出された（Bo Cong An 2019 年 10 月 15 日閲覧）。

さらに正義 a にも、ベトナム戦争後、北ベトナム人民軍と解放戦線との間にさまざまな温度差が存在していた（cf. 友田 1986）。たとえば、南ベトナム解放民族戦線（ないし南ベトナム共和臨時革命政府）の主要なメンバーは、ベトナム戦争後、ごく一部の例外を除いて、新政府の要職に就くことがなかった。また、文脈がやや異なるものの、先のベトナム共産党大会で、当時の首相であり、次期書記長候補の一人とも噂されていた、南部カーマウ省出身のゲン・タン・ズン（Nguyen Tan Dung）が政界を引退したことは記憶に新しい⁵⁾。ここから、ベトナム民主共和国（北の正義 a）と南部を勢力圏とした解放戦線（南の正義 a）とは、必ずしも一枚岩であったわけではないことが推察可能である⁶⁾。

再び今回のツアーに目を転ずると、観光実践から以下の点が読み取れる。まず、ツアーならびにクチトンネルの展示では、ベトナム戦争がベトナム対アメリカの戦争として図式化されている。この点はツアーガイドの解説に

よく表れている。たとえば、往路の車中におけるツアーガイドの解説ではベトナム戦争をアメリカの侵略戦争と位置づけていた。クチトンネルのツアーでの解説でも同じような傾向がみられた。すなわち、アメリカ軍に対抗して、クチの人びとがどのように戦闘を展開したのかに重点が置かれていた。また、A社のパンフレットでも「ベトナムとアメリカとの戦争（chien tranh Viet-My）」という表現が使われていた。

次に、トンネルの史跡では、社会経済的に厳しい環境下において、現地の人びとがいかにベトナム戦争を戦い抜いたのかが強調されている。ツアー参加者は、（観光用に拡張されてもなお）狭いトンネル内を実際に通るだけでなく、たとえば、武器や罌の製造が手作業を中心としていたことがわかるレプリカを見学する。また、試食で提供されるキャッサバは、当時の食事状況が粗食であったことの隠喩と推察できる。あわせてツアーガイドも前章の①における、細身の身体の説明のなかで、当時食糧が十分になかったと解説し、②ではアメリカ軍は何でも使い捨てにしていたと説明していた。ここから物資の乏しいベトナムと潤沢な資金を持つアメリカの戦いという構図がみてとれる。また、旅行ガイドブックでも「トンネルに足を踏み入れた人びとは、共産ゲリラの能力、意志の強さ、忍耐力に感嘆する」などの表現が使われていた。

そしてツアーの最後に視聴する資料映像は、前述した①～⑭で体験したものの映像化しており、当時の映像資料を鑑賞することで観光体験を裏付ける効果を有する。また、2000年代のツアーにおける写真をみると、映像資料が映し出されるテレビの上に、ホーチミンの肖像画が飾られ、さらにその上に解放戦線の旗ではなくベトナム



写真 17 映像資料の視聴風景。テレビの上にホーチミンの肖像画と金星紅旗がみえる（2008年3月撮影）。

社会主義共和国の国旗（金星紅旗）が掲げられていた（写真17）。ただし、この映像には、最初の①のトンネル入り口の場面がみられない。なお、前述のように旅行会社のパンフレットでは、映像資料の視聴を最初に体験すると記されている。しかしながら、ツアーにおいては最後に視聴する。

さらに、上記と関連して、正義cはこのツアーや展示には現前化してこない。正義cは、語られないだけでなく、より一般的にみると前述のように政治的制約を強く受けている。したがって現在のベトナムにおいて、正義cは語ってはいけなく／語ることができない正義とみてよいであろう。前述のツアーガイドの説明では正義cが触れられることがなかった。また、正義bの主体、すなわちアメリカ軍はすでに撤退をしており、現在のベトナムには存在しない。ここにおいて、革命史跡の展示おける正義の絶対化が成り立ちうる。つまり正義aは正しい正義としてツアー現場において展示され、視点を変え、ナショナリズムの再生産に結びついている⁷⁾。

また、南の正義aについて「アメリカ対ベトナム」の図式のなかで北の正義aとの微妙な温度差や差異がかき消されているように観取される。ツアーガイドは、トンネルを使用した戦闘を展開した人びとの呼称を、主としてクチの人びと（Cu Chi people）としていた。一部、往路の車中ではコミュニスト、ツアーのなかで戦闘服を着たマネキンを前にした場面ではゲリラという表現が使われた。しかし、確認できた範囲では、南ベトナム解放民族戦線（英語では、National Liberation Front、NFL）という表現は使われなかった。また、旅行会社のパンフレットやガイドブックでも、一部を除き、解放戦線の用語が登場する頻度は非常に低い。たしかに、NFLの表現を用いない背景には、「観光客がこの単語を知らない」という認識がともなうかもしれない。しかしながら、その場合でも、一般に普及している単語ではないと判断する当事者の思考に注目する必要があるだろう。

こうした観光資源、言い換えれば革命史跡の政治化ともとらえられる現象がみられる反面、アトラクション化の傾向もみられる。たとえば、⑩トンネル体験（観光客用）だけでなく、①トンネル（武器庫）の入り方の解説場面

では、説明後、写真3で示したとおり、実際に観光客が入ることができる。ここでは当時のゲリラ戦の一部を体験するという以上にフォトジェニックな場となっている。

観光客が戦車に登った姿を写真撮影する行為もまた同様であろう。実際、B社のパンフレットでは「戦車やベトナムの兵士のマネキンと一緒に記念撮影する」との記載がみられた〔強調は引用者〕。ここには、スマートフォンによる写真撮影ならびにそれに付随するSNSへの投稿という社会現象が関連していることが類推される。また、ライフル試射は、クチトンネルの公式パンフレットでも「エンターテインメント・娯楽」の位置づけで紹介されている。革命史跡のアトラクション化現象は、ともすれば脱政治化の可能性を内包する。

6. むすびにかえて

本稿では、ベトナムのクチトンネルを事例として、ダークツーリズムがもつ社会空間的な意義を検討し、その政治的な特徴を明らかにすることを目的とした。結果として、以下の3点を指摘できる。

第1に、ツアー全体を通じて、ベトナム戦争が「ベトナム対アメリカ」の戦争として描写されている点があげられる。たしかにベトナムにおいては、ベトナム戦争を「抗米救国戦争」と呼ぶようにアメリカを主要な敵としていた。しかしながら、前述のように戦争にはさまざまなアクターが関わっており、複雑な様相を示していた。ツアーにおいては、そうした複雑性が捨象され、簡略化された形でベトナム戦争が展示・表象されている。同時にツアーでは、物資の乏しいベトナムが潤沢な資金を有するアメリカに対抗し、戦争に勝利したという一貫したストーリーが展開されている。

第2に、これと関連して、革命史跡における観光実践がナショナリズムの再生産に寄与している点があげられる。革命史跡のツアーにおけるストーリーは、ベトナム社会主義共和国が「ベトナム対アメリカ」の戦争に勝利し

た結果として成立したととらえられている。さらに共産党一党支配体制をとる社会主義体制にあつては正義の絶対化が生じやすい。すなわち、ベトナム戦争の勝利によつてもたらされた正統性が正しいもの、真正なものとして提示される。こうした正義の絶対化により、革命史跡のツアー実践が現行体制の正しさを追体験する行為となる。この点がナショナリズムの再生産に寄与している。言い換えれば、価値観の逆転が起こっているともとらえる。

第3に、革命史跡ツアーの政治化の動きに対して脱政治化の傾向がみられることがあげられる。ツアー内容がアトラクシオンの要素を多く含むようになると、政治化の動きとは必ずしも相容れない状況が生じる。SNSが普及したことによるフォトジェニックな場を求める観光客が増えるにしたがつて、トンネルの入り方や観光用のトンネル体験などがそうした素材を提供することになる。こうした点は革命史跡が有しているはずの正当性の揺らぎをもたらし可能性をはらむ。

今後の着眼点として、ダークツーリズムの実践現場、具体的にはベトナムの革命史跡ツアーにおいて、どのような条件が揃うと脱政治化やそれに付随するアトラクション化がみられるのか、その論理を詳らかにする必要性があげられる。

ダークツーリズムにみる脱政治化の一仮説として、クチトンネルは、革命史跡であると同時に、すでに存在しない解放戦線が強く関与した史跡である点があるのではなからうか。1960年に結成された南ベトナム解放民族戦線は、ベトナム戦争の終結後、1977年1月にベトナム祖国戦線に吸収される形で正式に解体された。現存しない組織は、他者からの同時代的な価値判断の対象とはなりえない。そのため、容易に脱政治化やアトラクション化がみられるのかもしれない。同時に、クチトンネルのツアー実践にみられる脱政治化の動きが現行体制下への批判をともなっていないことも背景にある可能性も考えうる。共産党一党統治下において、現行体制下への批判、言い換えれば反体制運動的な側面をともなわない範囲では、革命史跡の脱政治化、換言すればアトラクション化が許容されるともとらえる⁸⁾。

また、すでにみたように、北ベトナム軍と解放戦線との微妙な温度差を消し去りつつ、革命史跡を展示することで、現体制の正当性を担保し、存続根拠を示している。したがって、クチトンネルでは、政治化と脱政治化との微妙なバランスないしせめぎ合いの上にツアーが成立しているのではなかろうか。であれば、この力学、ないし文脈に応じた状況依存的な論理を解明する必要があろう。

ただし、こうした考察は、一つの革命史跡だけでなく、比較調査をおこなうことで精緻化が可能となる。たとえば、フランス植民地時代や南ベトナム政府の管理下で囚人を収容したコンダオ刑務所の跡地のツアーや隣接の博物館展示と比較することで着眼点が得られると考えている⁹⁾。この点を今後の課題として継続調査を実施してゆきたい。

付記：2017年5月ならびに2018年3月の調査にあたっては、研究分担者として、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（B）「東アジアにおける戦争観光とナショナリズム」課題番号15H03140、研究代表者：高山陽子（亜細亜大学国際関係学部教授）の助成を受けた。なお、2018年3月の調査は、上記科学研究費補助金の代表者ならびに一部の分担者と共同で実施した。

註

- 1) ダークツーリズムという用語を提唱する契機については、以下を参照のこと（Foley and Lennon 1996a）。
- 2) クチ（Cu Chi）をベトナム語で発音した場合、「クーチー」に近い音になる。日本語では、一般的に「クチ」と表記されることから、本稿ではこちらを採用した。
- 3) 2017年5月および2018年3月にベンディンのトンネルツアーに参加して参与観察調査をおこなった。また、2000年代に同じ旅行会社のツアーに2回参加し、参与観察調査を実施した。くわえてパッケージツアーではなく、個人旅行の形でベンズックの革命史跡も一度訪問している。
- 4) 当然、これらのベトナム人は、国内旅行者とも考えうる。しかしながら、現地の旅行会社が主催する他のツアー（メコンデルタツアーやカンボジアツ

アー)では、越僑の参加を確認している。また、今回のツアーガイド(ベトナム人)はすべて英語で解説をしていた。仮に越僑の場合には、参加動機を含め、どのようなツアー体験をしているのかが興味深い。この点は今後の課題としたい。

- 5) 日本経済新聞の電子版では「崩せなかった「北の壁」経済改革派、ズン首相が失脚」と題した長文記事を掲載し、背景を解説している(日本経済新聞 電子版 2016年2月16日閲覧)。
- 6) ベトナム戦争のアクターについての複雑な様態は、拙稿(大塚 近刊)にて、ライフストーリーに基づいた分析を試みている。
- 7) 2000年代に参与観察調査をした際に入手したパンフレットには、ベトナムの小学生の団体がクチトンネルを訪問している写真が掲載されていた。クチトンネルは、ベトナムの小中学生が社会科教育の一環として訪問する先となっている。こうした点もナショナリズムの再生産に寄与していると考えられる。また、2009年6月時点のクチトンネルのオフィシャルホームページでは訪問者数が公開されていた。2007年時点までの訪問者数を確認すると、外国人と比較して、より多くのベトナム人がクチトンネルを訪れていた。現在、ホームページ上では訪問者数が公開されていない。
- 8) この点については、ホーチミンの神格化/土産物(グッズ)化も類似したコンテキストでとらえることができる。詳しくは、大塚(2015)を参照。
- 9) 暫定的ではあるが、コンダオ刑務所の事例に鑑みると、革命史跡と特定の歴史的著名人とが結びつくことで、アトラクション化/脱政治化の進展が抑制される可能性を推察しうる。たとえば、2019年9月上旬にコンダオにて予備調査を実施したとき、コンダオ刑務所の史跡とヴォー・ティ・サウ(Vo Thi Sau)とが連想関係にあるという仮説が得られた。

引用文献

- Foley, M. and Lennon, J. (1996a) Editorial: heart of darkness, *International Journal of Heritage Studies*, Vol. 2-4, pp. 195-197.
- Foley, M. and Lennon, J. (1996b) JFK and dark tourism: a fascination with assassination, *International Journal of Heritage Studies*, Vol. 2-4, pp. 198-211.
- Lennon, J. and Foley, M. (2000) *Dark tourism: the attraction of death and disaster*, London; Continuum.
- Mangold, T. and Penycate, J. (2005) *The tunnels of Cu Chi: a remarkable story of war*, London; Cassell.
- Seaton, A. V. (1996) Guided by the dark: from thanatopsis to thanatourism, *International Journal of Heritage Studies*, Vol. 2-4, pp. 234-244.

- Seaton, A. V. (2002) Thanatourism's final frontiers? visits to cemeteries, churchyard and funerary sites as sacred and secular pilgrimage, *Tourism Recreation Research*, vol. 27-2, 73-82.
- Stone, P. (2006) A dark tourism spectrum: towards a typology of death and macabre related tourist sites, attractions and exhibitions, *Tourism: An Interdisciplinary International Journal*, Vol. 54-2, pp. 145-160.
- Stone, P. and Sharpley, R. (2008) Consuming dark tourism: a thanatological perspective, *Annals of Tourism Research*, Vol. 35-2, pp. 574-595.
- 大塚直樹 (2015) 「ベトナム社会主義のなかのホーチミンと観光実践」『国際関係紀要』 vol. 24-1/2、131-142 ページ。
- 大塚直樹 (2019) 「銅像空間の歴史地理学——ホーチミン像を事例として」『立教大学観光学部紀要』 vol. 21、83-90 ページ。
- 大塚直樹 (近刊) 「ベトナム戦争期における同時代的な記憶とその再生——在ベトナム日本人のライフストーリー」『立教大学観光学部紀要』 vol. 22 所収予定。
- 友田錫 (1986) 『裏切られたベトナム革命——チュン・ニュー・タンの証言』中央公論社 (中公文庫)。
- ハーヴェイ、D. (1999) 『ポストモダンシティの条件』吉原直樹監訳、青木書店。

インターネット資料

- 崩せなかった「北の壁」経済改革派、ズン首相が失脚：日本経済新聞 <https://www.nikkei.com/article/DGXLASF03H1C_U6A200C1000000/> 最終閲覧日：2016年2月16日。
- トラベラーズチョイス ホテルアワード - トリップアドバイザー [アジア 25] <<https://www.tripadvisor.jp/TravelersChoice-Landmarks-cTop-g2>> 最終閲覧日：2017年7月15日。
- トラベラーズチョイス ホテルアワード - トリップアドバイザー [ベトナム 10] <<https://www.tripadvisor.jp/TravelersChoice-Landmarks-cTop-g293921>> 最終閲覧日：2017年7月15日。
- Bo Cong An <<http://bocongan.gov.vn/khung-bo/bai-viet-to-chuc-khung-bo/thong-bao-ve-to-chuc-khung-bo-chinh-phu-quoc-gia-viet-nam-lam-thoi-14.html>> 最終閲覧日：2019年10月15日。
- Dia Dao Cu Chi <<http://diadaocuchi.com.vn/>> 最終閲覧日：2019年9月26日。
- Xet xu cac doi tuong tuyen truyen chong Nha nuoc Cong hoa xa hoi chu nghia Viet Nam - Bao An Giang Online <<http://baoangiang.com.vn/xet-xu-cac-doi-tuong-tuyen-truyen-chong-nha-nuoc-cong-hoa-xa-hoi-chu-nghia-viet-nam-a216790.html>> 最終閲覧日：2018年1月25日。

Social space of dark tourism in Vietnam: a case study of revolutionary historic site the Cu Chi tunnel

Naoki OTSUKA

The purpose of this paper is to examine the spatial significance of dark tourism and to clarify its political characteristics, using as an example the Cu Chi tunnel in Vietnam. The results are as follows. First, throughout the Cu Chi tunnel tour, the Vietnam War is described as a “Vietnam vs. America” War. In fact, the Vietnam War involved various actors and showed complex aspects. However, in the tour, the complexity of the war is abandoned and displayed in a simplified form. At the same time, the tour has a consistent story that Vietnam, which is scarce of supplies, won the war against America, which has plenty of money.

Secondly, in connection with the above, tourism practices in revolutionary historic sites contribute to the reproduction of nationalism. The story of the revolutionary historic site tour is seen as a result of Vietnam winning the “Vietnam vs. America” war. In this context, the legitimacy brought about by the victory of the Vietnam War is presented as correct and authentic. As a result of this absolute correctness, the tour of the revolutionary historic site is an act of re-experiencing the correctness of the current political system.

Third, there is a tendency toward depoliticization that goes against the politicization of tourism on historic sites of revolution. As SNS spreads and the number of tourists seeking photogenic places increases, the entertainment element of the tour has become stronger, and such materials will be provided to tourists.

These points have the potential to bring about fluctuations in the justness that a revolutionary historic site should have.

